

人と組織の
新・論・点

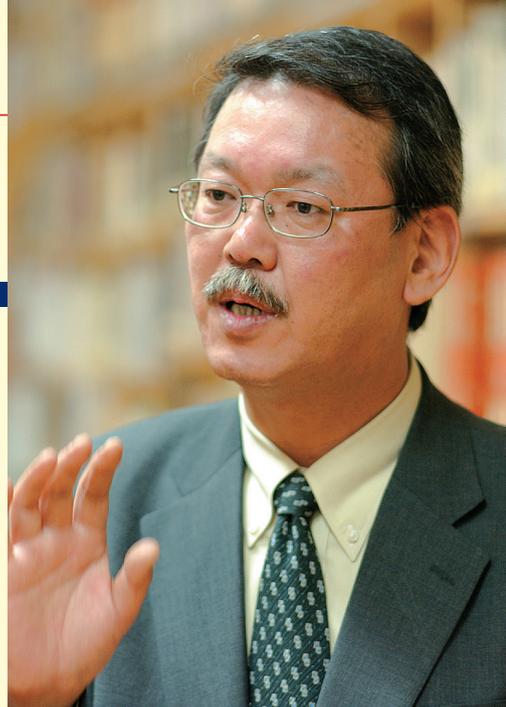
CATALYST*

カタリスト

荒瀬克己

国公立大学合格者を一桁から100人に増やした京都堀川高等学校校長

すべては一人ひとりの「知りたい」から始まる



「京都の公立高校はアカン、難関大学目指すなら私立や」。そう言われる中で学校改革に乗り出したのは、1999年の春でした。改革でどんな学校を目指すのか。私たちがその判断基準にしたのは、「当たり前かどうか」でした。大学進学だけでなく、進学した後の人生をどう生きるかが大切なのは当たり前。学校が楽しい方がいいのも当たり前です。こうして目指すべき方向が導き出されました。

全員で議論を尽くすから現場が判断できる

ただ改革といっても堀川は公立ですから、通常の人事異動以外に教員は変わりません。しかも学校は鍋蓋組織と呼ばれるように、職階のないフラットな組織ですから、ピラミッド型組織のようにトップダウンで物事は動きません。ではどう改革を進めるかといったら、教員全員が議論に参加し、理念を共有できるようにするのです。

たとえば授業の仕方を改善しようと授業の公開を提案したとき、

反対の声が上がりました。公開して意味があるのか、人が来たら生徒が勉強に集中できないと言うんですね。そこでまずは全員で話し合うんです。メリット、デメリット、想定される問題をすべて出す。そして、その上で校長の責任で決断する。すると、たとえ実際に問題が起きて、皆が一度納得しているから逃げないし、良くしようとする姿勢が生まれます。生徒が育っているかは現場の教員しか分かりません。ですから教員が自分で判断し改善できるようになることが大切なんです。

あえて二兎を追う

私たちが重視しているのは、二兎を追うということです。たとえば「よく学ぶ」と「よく遊ぶ」の両方を追う。これはどちらか一方を選べるものではなく、二兎を追うからこそ、学びと遊びの両方の質を高められるのです。

学習も「知識習得型」と「課題探究型」の両方を追います。堀川

では課題探究型の学びを大切にしていますが、それには情報の集め方や論文の書き方といった学びの作法や基礎的な知識を習得しておく必要があるからです。

ここで大切なのは、生徒の興味を引き出す仕掛けをいかにつくるかです。授業や実験、図書館の本や海外研修。生徒はこれらの仕掛けをきっかけに、自分の「知りたい」を見つけ、学ぶ楽しさに目覚めます。大学進学というのはその「知りたい」の延長線上にある目に見える結果の一つです。実際、改革開始時の一年生が卒業した2002年の春、前年6人だった国公立大学の現役合格者数は106人になりました。

ただ生徒の「卒業後の近い未来」だけでなく、「社会でどう生きるかという遠い未来」も大切です。私たちは、自立しようとする意思をもった18歳を育てたいと思っています。自立とは一人で生きることではなく、人と関わって生きていくこと。堀川は、生徒たちが将来に向けて力を養える巣箱でありたいと思っています。

文/内田美代子(編集部)

PROFILE あらせ・かつみ

京都市立堀川高等学校校長。1953年、京都府生まれ。京都教育大学卒業後、京都市立伏見工業高校国語科教諭。98年、堀川高校教頭、2003年から現職。「堀川の奇跡」と呼ばれる学校改革を成功させた。2005年から中央教育審議会教育課程部会委員も務める。著書に「奇跡と呼ばれた学校」(朝日新聞社)。